第1章 行列とその計算

●行列

定義 1.1 行列 matrix

 $m \times n$ 個の数 $a_{i,j}$ (i=1,2,...m,j=1,2,...,n)を

$$\begin{bmatrix} a_{1,1} & a_{1,2} & \cdots & a_{1,n} \\ a_{2,1} & a_{2,2} & \cdots & a_{2,n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m,1} & a_{m,2} & \cdots & a_{m,n} \end{bmatrix}$$

のように並べたものを m×n 型の行列という。

これをAとすると $a_{i,j}$ を行列Aの(i,j)成分という。

またAは、 $A = [a_{i,j}]_{m \times n}$ などと略記することもある。

[注]

行列 A,B が等しい(A=B)とは

 $A \ \ \, B$ が同じ $m \times n$ 型の行列で

同じ成分はどれも等しいことである。

例 1.2

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 5 \\ 4 & -4 & -3 \end{pmatrix}$$
は_____行列で

(1,2)成分は___,(2,1)成分は___。

●行列の計算

	玉	数
A	30	100
В	60	80
C	80	70

テスト①

	国	数
A	50	90
В	60	30
С	60	50

テスト②

平均

*Q*和は_____

Q スカラー倍は_____

	玉	数
A	30	100
В	60	80
С	80	70

	大学 U	大学 V
玉	1	1
数	1	2

合計

定義 1.4 さまざまな行列

■零行列(zero matrix)

すべての成分が 0 の行列を零行列といい、 \boldsymbol{o} で表す。

例

■正方行列(square matrix)

 $m \times n$ 行列をn 次正方行列という。

例

■対角行列(diagonal matrix)

対角成分以外が全て0の正方行列を対角行列という。

例

■単位行列(identity matrix)

対角成分が全て1の対角行列を単位行列といい、Eで表す。

例

[注]

$$\delta_{i,j} = \begin{cases} 1(i=j) \\ 0(i \neq j) \end{cases}$$

をクロネッカーのデルタという。

これを用いると、

$$E_n = \left(\delta_{i,j}\right)_{n \times n}$$

である。

●O と *E* の性質

定理 1.5

0 はAと同じ型の行列とし

$$\mathbf{0} + A = A + \mathbf{0} = A$$

が成立。またA、O をn次正方行列とすれば

$$A\boldsymbol{o} = \boldsymbol{o}A = \boldsymbol{o}$$

が成立。

また、O をn 次正方行列とし

$$AE = EA = A$$

が成立。

●行列の計算法則

計算できる行列 A,B,C では

基本事項 行列の計算法則

A + B = B + A(和の交換律)

commutative law

$$\begin{cases} (A+B)+C=A+(B+C)\\ (AB)C=A(BC) \end{cases} (結合律)$$

associative law

a,b をスカラーとし

$$\begin{cases} a(A+B) = aA + aB \\ (a+b)A = aA + bA \\ A(B+C) = AB + AC \end{cases} (分配律)$$
$$(A+B)C = AC + BC$$

distributive law

*

例 以下をみたす2次正方行列A,Bの例を1つだせ。

(1) $AB \neq BA$

(2) AB=BA

例 A,B,E は n 次正方行列

(1)
$$(A + 2E)(A + 3E)$$

[注]

(2)
$$(A + B)^2$$

[注]

何

$$\begin{cases} X+Y=\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{pmatrix} \cdots \textcircled{1} \\ X-Y=\begin{pmatrix} 3 & 0 \\ -1 & 2 \end{pmatrix} \cdots \textcircled{2} \end{cases} \mathcal{E} \overset{\triangleright}{\approx} X^2-Y^2 \mathcal{E} ?$$

 $*AB = \mathbf{0} \Rightarrow A = \mathbf{0}$ または $B = \mathbf{0}$ は偽

*これからA、Eを2次正方行列とし $A^2 - 5A + 6E = \mathbf{0}$

●逆行列

定義 1.5 逆行列 inverse matrix

n 次正方行列 A に対し

n 次正方行列 X が

$$AX = XA = E$$

となるようにとれるとき、Aに逆行列 A^{-1} が存在するという。

このときのXが A^{-1} である。

例 $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 5 \end{pmatrix}$ の逆行列 A^{-1} が存在することを示し、 A^{-1} を求めよ。

定理 1.6

$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$
の逆行列は

$$ad - bc \neq 0$$

のときに存在し

$$A^{-1} = \frac{1}{ad - bc} \begin{pmatrix} d & -b \\ -c & a \end{pmatrix}$$

例 Aに逆行列が存在するときは求め、なければ「ない」とこたえよ。

$$(1) \ \ A = \begin{pmatrix} 2 & 4 \\ 1 & 3 \end{pmatrix}$$

$$(2) \ A = \begin{pmatrix} -1 & 3 \\ 2 & -6 \end{pmatrix}$$

定理 1.7

n次正方行列Aに逆行列があるなら、それは1通り

第2章 連立1次方程式・逆行列① ------

●連立1次方程式

例
$$\begin{cases} 2x + 5y = 6 \\ 5x + 12y = 2 \end{cases}$$
を解け。

•係数行列、拡大係数行列

定義 2.1

 x_1, x_2, \cdots, x_n についての連立方程式

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \dots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \dots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{m1}x_1 + a_{m2}x_2 + \dots + a_{mn}x_n = b_m \end{cases}$$

は

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

と同値。

この連立方程式に対して

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} \end{pmatrix}$$

を係数行列 (coefficient matrix) と定義。

また

$$x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}, b = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

としたら、連立方程式はAx = bで

$$(A \vdots b) = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} & \vdots & b_1 \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} & \vdots & b_2 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \cdots & a_{mn} & \vdots & b_n \end{pmatrix}$$

を拡大係数行列 (expansion matrix) と定義。

例

$$\begin{cases} x_1 + 2x_2 + 3x_3 = 4 \\ 3x_1 - 5x_2 = 0 \end{cases}$$
 の係数行列、拡大係数行列を求めよ。 $-x_2 + 4x_3 = -3$

●行基本変形

基本事項

連立方程式の同値変形として k を定数とし

$$\begin{cases} f=0\\ g=0 \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} f=0\\ kf+g=0 \end{cases}$$

がある。

[証明]

これを用いて

$$\begin{cases} 3x + y = 5 \\ 5x + 3y = 7 \end{cases}$$

定義 2.2 行基本変形

1.1つの行を0でない定数倍する。 2.2 つの行を入れ替える。

(3. ある行の定数倍を他の行に加える。

を行基本変形と定義。

またAを(何度か)行基本変形し、行列Bになるとき $A\sim B$ と書く。

例

$$\begin{cases} x_1 + x_2 + 2x_3 = 0 \\ -x_1 + 2x_2 + 3x_3 = -7を解け。 \\ 3x_1 + 5x_2 + x_3 = 12 \end{cases}$$

例

$$\begin{cases} x_1 + 2x_2 + 3x_3 = 4 \\ x_2 + x_3 = 1 & を解け。 \\ x_1 + 4x_2 + 5x_3 = 6 \end{cases}$$

[注]

定義 2.3 簡約な行列

ある行列が

- (I) すべて0の行の下はすべて0
- (II) ある行の成分を左からみていくときにはじめてでてくる0でない数は1
- (III) 第i行の主成分がj(i)列目にでてくるとき、 $j(1) < j(2) < \cdots$ が成立
- (IV) 主成分を含む列の主成分以外の成分は 0
- の4つをみたすとき、それを簡約な行列という。

また、行列 A から行基本変形を用い、簡約な行列 B つくることを A を簡約化するといい、B を A の 簡約化という。

例 簡約なら○をつけ、そうでなければ簡約化

- $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$
- $\begin{pmatrix} 1 & 5 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$
- $\begin{pmatrix} 1 & 2 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$
- $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$
- $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$
- $\begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$

定理 2.4

行列 A は行基本変形で簡約化でき、それは一意

定義 2.5 階数 (rank)

行列Aの簡約化をBとするとき、行列Aの階数rank(A)を

$$rank(A) = (Bの主成分の個数)$$

と定義。

例 次の行列を簡約化し、階数を答えよ。

$$(1) \qquad A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 0 \\ 2 & 3 & 1 \\ 0 & -1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$(2) \qquad A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & -1 & 3 \\ 2 & 4 & 2 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

まとめ 簡約

簡約化の手法

できるだけ左に1をつくる

 \downarrow

その1で上下の行の数を0に

 \downarrow

階段になるよう、上にもってく。

- →これを繰り返す。
- ●連立方程式の解法
- 例 次の方程式をとけ

$$(1) \qquad \begin{pmatrix} 1 & 0 & 3 & 4 \\ 2 & 1 & 2 & 3 \\ 1 & 1 & -1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

(2)
$$\begin{pmatrix} 1 & -4 & 3 & 4 & -3 \\ 1 & -2 & 0 & 1 & 2 \\ -1 & 2 & 2 & 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \\ x_5 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

定理 2.6

行列Aが $m \times n$ 行列のとき、 $\begin{cases} \operatorname{rank}(A) \leq m \\ \operatorname{rank}(A) \leq n \end{cases}$

定理 2.7

 $A em \times n$ 行列とするとき、

1.Ax = bの解が存在するのは

 $\operatorname{rank}(A : \boldsymbol{b}) = \operatorname{rank}(A)$

2.上の解が1つだけなのは

 $rank(A : \mathbf{b}) = rank(A) = n$

定理 2.8

 $A em \times n$ 行列とする。

同次型の連立1次方程式

 $Ax = \mathbf{0}$ の解が自明な解 $(x = \mathbf{0})$ のみであるのは、

rank(A) = n

第3章 連立1次方程式・逆行列② ------

く復習>

定義 1.6

A をn 次正方行列とする

n 次正方行列 X が

$$AX = XA = E$$

をみたすとき、 $X \, \text{ti} \, A$ 逆行列といい、 $X \, \text{ti} \, A^{-1} \, \text{ti} \, E$ 表す。

●逆行列の求め方(方法のみ)

例
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 5 \\ 2 & 4 \end{pmatrix}$$
の逆行列があれば求めよ。

例
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 3 & 4 & 8 \\ 2 & 3 & 6 \end{pmatrix}$$
の逆行列があれば求めよ。

まとめ

n 次正方行列 A の逆行列を調べるとき、A の簡約化を B とし(A|E)を考え

 $(A|E)\sim(B|\blacksquare)$

と変形。

- 1. B = Eなら A^{-1} が存在し、 $A^{-1} = \blacksquare$
- 2. $B \neq E$ なら A^{-1} が存在しない。

●正則 (non-singular,regular)

定義 3.1 正則

A をn 次正方行列とする。

A が逆行列をもつとき、A を正則な行列と定義。

定理 3.2

A,B を n 次の正則な行列とするとき

- ① A^{-1} は正則で $(A^{-1})^{-1} = A$
- ② AB は正則で $(AB)^{-1} = B^{-1}A^{-1}$

[証明]

定理 3.3

A を n 次正方行列とする。

Aのある行の成分が全て0

⇒A は正則ではない。

[証明]

●基本行列(elementary matrix)

定義 3.4

以下の3種類の正方行列を基本行列という。

$$1. \ P_i(c) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & c & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} (c \neq 0)$$

$$3. \ \ R_{ij}(\mathbf{c}) = \begin{pmatrix} 1 & \Box & \vdots & \Box & \Box & \vdots & \Box & \Box \\ \Box & \ddots & \vdots & \Box & \Box & \vdots & \Box & \Box \\ \Box & \Box & 1 & \cdots & \cdots & c & \cdots & \cdots \\ \Box & \Box & \Box & \ddots & \Box & \vdots & \Box & \Box \\ \Box & \Box & \Box & \Box & \ddots & \vdots & \Box & \Box \\ \Box & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots & \ddots & \Box \\ \Box & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots & \ddots & \Box \\ \Box & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots & \ddots & \Box \\ \end{bmatrix}$$

行列 A にそれぞれ左からかけて、

まとめ

- 1. $P_i(c)$ はAのi行目をc倍 $(c \neq 0)$
- 2. Q_{ij} はAのi,j行目を入れかえ
- 3. $R_{ii}(c)$ はAのi行目にj行目のc倍を加える
- →基本行列を左からかけることが行基本変形と対応!

例

(1)2 行目を 4 倍したい。

(2)2、3行目をいれかえたい。

(2)1 行目に、3 行目の2 倍を加えたい。

定理 3.5

A の簡約化が B のとき、ある基本行列 P_1,P_2,\cdots,P_n を用い $P_nP_{n-1}\cdots P_1A=B$

とかける。

[証明]

定理 3.6

基本行列は正則で、逆行列も基本行列

[証明]

※

まとめ

 $P_{\rm i}(c)$ …i行目をc倍 $(c \neq 0)$

 $Q_{ij}\cdots i,j$ 行目を入れかえ

 $R_{ij(c)}\cdots i$ 行目にj行目のc倍をたす

定理 3.7

A を n 次正方行列とする。次の3つは同値

- (1) A は正則
- (2) $\operatorname{rank}(A) = n$
- (3) Aの簡約化はE

[証明]

定理 3.8

正則行列は基本行列の積でかける

[証明]

●逆行列の求め方 (理論)

第4章 行列式①

●2 次・3 次の行列式

正方行列 A の行列式(determinant)をdet Aや|A|とかく。

定義 4.1

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22} - a_{12}a_{21}$$

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix}$$

$$= a_{11}a_{22}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{13}a_{21}a_{32}$$

$$-a_{13}a_{22}a_{31} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32}$$

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix} \qquad \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix}$$

(サラス (Sarus) の公式)

例

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 2 \end{vmatrix} =$$

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 2 & 1 & 3 \\ 3 & 0 & 4 \end{vmatrix} =$$

●4 次以上の行列式

●置換(permutation)

定義 4.2

 $\{1,2,\cdots n\}$ から $\{1,2,\cdots n\}$ への全単射を、n 文字の置換という。 (1 から n を並びかえる操作) $\rightarrow n$ 文字の置換は n! 通りある。

この置換の1つをσとし

$$\begin{cases} 1 \to k_1(\sigma(1) = k_1) \\ 2 \to k_2(\sigma(2) = k_2) \\ \vdots \\ n \to k_n(\sigma(n) = k_n) \end{cases}$$

であるとき

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & k_3 & \cdots & k_n \end{pmatrix}$$

とかく。また、n文字の置換全体の集合を S_n とかく。

例

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 4 & 3 & 1 \end{pmatrix}$$

 σ , $\tau \in S_n$ とする。 σ と τ の積 σ τ $\epsilon i \in \{1,2,\cdots n\}$ とし、

$$(\sigma_{\circ}\tau)(i) = \sigma(\tau(i))$$

で定義。

例

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}, \tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 1 \end{pmatrix} \mathcal{O} \succeq \stackrel{*}{\approx} \mathcal{I}$$

 $\sigma\tau =$

定義 4.4

全ての文字が変化しない置換を単位置換 (identity permutation) といい、ε で表す。

また、置換 σ は全単射ゆえ、 σ^{-1} が存在し、

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ k_1 & k_2 & \cdots & k_n \end{pmatrix}$$

のとき

$$\sigma^{-1} = \begin{pmatrix} k_1 & k_2 & \cdots & k_n \\ 1 & 2 & \cdots & n \end{pmatrix}$$

となる。 σ^{-1} を σ の逆置換(inverse permutation)という。

例

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 3 & 1 \end{pmatrix} \mathcal{O} \succeq \overset{*}{\geq}$$

 $\sigma^{-1}=$

 $[注]S_n$ について、積がどの2つの元どおしでも定義され

【①結合律をもつ、つまり
$$\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3 \in S_n$$
 とし、 $(\sigma_1\sigma_2)\sigma_3 = \sigma_1(\sigma_2\sigma_3)$ ②単位元が存在(これは ϵ) (3) σ の逆元が存在(これは ϵ^{-1})

より、 S_n はこの積を用い、群をなすとわかる。

$$\{1,2,\cdots n\}$$
のうち、 k_1,k_2,\cdots,k_r 以外はそのままで、 k_1,k_2,\cdots,k_r を「ずらす」、つまり

$$k_1 \rightarrow k_2, k_2 \rightarrow k_3, \cdots, k_{r-1} \rightarrow k_r, k_r \rightarrow k_1$$

とする置換を巡回置換(cyclic permutation)といい

$$(k_1, k_2, \cdots, k_r)$$

とかく。

例

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 5 & 2 & 3 & 1 & 4 \end{pmatrix} =$$

定理 4.6

すべての置換は巡回置換の積でかける。

例

(1)
$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 5 & 4 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

(2)
$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 \\ 5 & 4 & 6 & 7 & 1 & 3 & 2 \end{pmatrix}$$

2 文字の巡回置換(*i,j*)を互換(transposition)という。

例 (12) は互換 $\begin{pmatrix} 1 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$

定理 4.8

- $(1) \ (k_1,k_2,\cdots,k_r) = (k_1k_r)(k_1k_{r-1})\cdots(k_1k_2)$
- (2) 任意の置換は互換の積でかける

[証明]

定理 4.9

任意の置換を互換の積でかくとき一意性はないが、互換の個数の偶奇は一致

 $\varepsilon \in S_n$ を互換の積で表したときの互換の個数がkコのとき $\operatorname{sgn}(\sigma)$ を

$$\operatorname{sgn}(\sigma) = (-1)^k$$

と定義。

また、このkが

である。

[注]定理 4.9 より、写像

$$\operatorname{sgn}: S_n \to \{\pm 1\}$$

は well-defined。

例

$$\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 & 8 & 9 \\ 6 & 5 & 9 & 1 & 3 & 4 & 8 & 2 & 7 \end{pmatrix}$$

のとき $sgn(\sigma)$ は?

定理 4.11

 ε , σ , $\tau \in S_n \succeq \cup$

- (1) $\operatorname{sgn}(\varepsilon) = 1 \ (n \ge 2)$
- (2) $sgn(\sigma \tau) = sgn(\sigma)sgn(\tau)$
- (3) $\operatorname{sgn}(\sigma^{-1}) = \operatorname{sgn}(\sigma)$

[証明]

定義 4.12 行列式(determinant)

n 次正方行列 $A=\left(a_{ij}\right)$ に対し、A の行列式 $\det A$ を

$$\det A = \sum_{\sigma \in S_n} \operatorname{sgn}(\sigma) \, a_{1\sigma(1)} a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)}$$

と定義。

例

$$\begin{array}{ccc} (\ 1\) & A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ & a_{22} \end{pmatrix} \ \, \mbox{$\stackrel{\frown}{\ensuremath{\square}}$} \ \, \mbox{$\stackrel{\frown}{\ensuremath{\square}}$} \ \, ? \end{array}$$

第5章 行列式②

<復習>

 $A = (a_{ij})$ に対し、A の行列式 $\det A$ を

$$\det A = \sum_{\sigma \in S_n} \operatorname{sgn}(\sigma) \, a_{1\sigma(1)} a_{2\sigma(2)} \cdots a_{n\sigma(n)}$$

と定義。

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix}$$

定理 5.1

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & \cdots & a_{1n} \\ 0 & a_{22} & \cdots & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \vdots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & a_{n2} & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & \cdots & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \vdots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n2} & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

3×3で

 $\begin{vmatrix} 2 & 1 & 5 \\ 0 & 4 & 3 \\ 0 & 6 & 7 \end{vmatrix}$

例

$$\begin{array}{c|cccc} (1) & 5 & 1 & -3 \\ 0 & 2 & 1 \\ 0 & 5 & 3 \end{array} | =$$

$$\left(\begin{array}{ccccc} 2 & 1 & 4 & 7 \\ 0 & 3 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & -1 & 5 \\ 0 & 0 & 0 & 4 \end{array}\right] =$$

定理 5.2

上三角行列(upper triangular matrix)の行列式は

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ 0 & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ 0 & 0 & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11}a_{22}\cdots a_{nn}$$

定理 5.3 多重線型性 (multilinearity) a_{11} a_{1n} a_{11} :... 1 ÷ : 1 $ca_{in}| \equiv c |a_{i1}|$ (1) $|ca_{i1}|$... : a_{nn} I a_{n1} a_{11} a_{1n} ÷ (2) $|b_{i1} + c_{i1}|$ $b_{in} + c_{in}$ a_{n1} a_{nn} a_{11} a_{11} a_{1n} a_{1n} : | : $b_{in} \mid + \mid c_{i1} \mid$ c_{in} : a_{n1} a_{nn}

[証明]

定理 5.4

(1) 2 つの行をいれかえると行列式は-1 倍、つまり

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & \cdots & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{i1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{j1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{j1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{jn} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{i1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \Box & \Box & \Box & \Box & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & \cdots & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

- (2) 2 つの行が等しい行列の行列式は 0
- (3) i行目にj行目のC倍を加えても行列式は同じ。つまり、

$$\begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{i1} + Ca_{j1} & \cdots & \cdots & a_{in} + Ca_{jn} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{i1} & \cdots & \cdots & a_{in} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

例
(1)
$$\begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{vmatrix}$$

$$(2)\begin{vmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 1 & -2 \\ 1 & 2 & 3 \end{vmatrix}$$

定理 5.3,5.4 をまとめると

まとめ

- (1) ある行をC倍($C \neq 0$)したら、行列式は
- (2) 行のいれかえを行うと行列式は
- (3) ある行に他の行のc倍を加えたら、行列式は

となり、これで行基本変形し、上三角行列にすれば OK。

例

$$(1)\begin{vmatrix} 2 & 3 & -1 & 1 \\ 1 & -1 & 1 & 2 \\ -2 & 1 & 0 & 5 \\ -1 & 0 & 1 & 1 \end{vmatrix}$$

定理 5.5

A が正則 \Leftrightarrow det $A \neq 0$

[証明]

定理 5.6

(1) $P_i(c)$, Q_{ij} , $R_{ij}(c)$ を基本行列とし

$$\begin{cases} |P_i(c)| = c \\ |Q_{ij}| = -1 \\ |R_{ij}(c)| = 1 \end{cases}$$

(2) Pを基本行列、Aを行列とし

|PA| = |P||A|

(3) Pを正則行列、Aを行列とし

|PA| = |P||A|

[証明]

定理 5.7

|AB| = |A||B|

[証明]

定理 5.8

A が正則であるとき、

$$|A^{-1}|=\frac{1}{|A|}$$

[証明]

定理 5.9

|AB| = |BA|

例 Aを正方行列とする。ある自然数nを用い

 $A^n = \mathbf{0}$

となるならば、Aは正則でないことを示せ。

第6章 行列式③

●転置行列と行列式

定義 6.1

$$A = \left(a_{ij}\right)_{m \times n}$$

とするとき、

$${}^{t}A = \left(a_{ji}\right)_{m \times n}$$

と定義。これを A の転置行列(transposed matrix)という。

例

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \end{pmatrix} \uparrow_{\mathcal{S}} \downarrow_{\mathcal{S}} t_{\mathcal{A}} =$$

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix}$$

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 5 & -2 \\ 3 & -2 & 4 \end{pmatrix}$$

定理 6.2

A,Bを $l \times m$ 行列、Cを $m \times n$ 行列とし

- 1. t(tA)=A
- 2. ${}^{t}({}^{t}A+B)={}^{t}A+{}^{t}B$
- 3. ${}^{t}({}^{t}AC)={}^{t}C+{}^{t}A$

定理 6.3

A が正則 \leftrightarrow tA が正則

[証明]

定理 6.4

P を基本行列とし、 $\left| \stackrel{t}{\underline{\underline{\quad}}} A \right| = |P|$

[証明]

定理 6.5

 $\left| \underset{\square}{t} A \right| = |A|$

例

 $\begin{vmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 2 & 5 & 2 \\ 3 & 9 & 4 \end{vmatrix}$

転置して、行基本変形し、転置とることにより、列基本変形で、行列式は

まとめ

- 1. ある列をC(≠0)倍→行列式も C倍
- 2. 2 つの列を入れかえ→行列式は-1 倍
- 3. ある列に他の列の定数倍をたす→行列式はわからない

とわかる。

$$\begin{vmatrix} a_{11} & 0 & \cdots & 0 \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

例

$$\begin{vmatrix}
1 & 2 & 0 & 3 \\
2 & 4 & 3 & 1 \\
-1 & 1 & 0 & 0 \\
2 & 3 & 1 & 0
\end{vmatrix}$$

●余因子展開(cofactor expansion)

例

$$\begin{vmatrix} 3 & 1 & 5 \\ 2 & 2 & 3 \\ 4 & 1 & 7 \end{vmatrix}$$

定義 6.7

 $A = \left(a_{ij}\right)_{m \times n}$ に対し、第i行と第j列を除いてできる行列を A_{ij} とする。

例

$$A = \begin{pmatrix} 3 & 1 & 4 \\ 4 & 0 & 5 \\ 8 & -1 & 4 \end{pmatrix}$$
 のとき

 A_{11}

 A_{23}

定理 6.8

 $A = (a_{ij})$ のi行目の成分が、(i,j)成分以外全て0のとき、

$$|A| = (-1)^{i+j} a_{ij} |A_{ij}|$$

また、j列目の成分が、(i,j)成分以外全て0のとき、

$$|A| = (-1)^{i+j} a_{ij} |A_{ij}|$$

$$|A| = \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & \cdots & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & & & \vdots \\ a_{i1} & a_{i2} & \ddots & & a_{i1} \\ \vdots & \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

定理 6.9

$$A = (a_{ij})_{n \times n}$$
のとき、

$$|A| = \sum_{j=1}^{n} (-1)^{i+j} a_{ij} |A_{ij}|$$

これを第i行の余因子展開という。 また、

$$|A| = \sum_{i=1}^{n} (-1)^{i+j} a_{ij} |A_{ij}|$$

これを第*j*列の余因子展開という。

例

$$\begin{vmatrix} 2 & 1 & 3 \\ 1 & 2 & 0 \\ 1 & 3 & 0 \end{vmatrix}$$

$$\begin{vmatrix} 4 & 2 & 1 \\ 0 & 2 & 0 \\ 3 & -1 & 1 \end{vmatrix}$$

定義 6.10

 $A = (a_{ij})_{m \times n}$ に対し、

$$\tilde{\alpha}_{ij} = (-1)^{i+j} |A_{ij}|$$

と定義。これを A の第(i,j)余因子という。

これを用い、Aの第i行の余因子展開は

$$|A| = \sum_{j=1}^n a_{ij} \widetilde{a_{ij}}$$
とかける。

また、Aの余因子行列 $ilde{A}$ を

$$\tilde{A} = \mathop{\boxtimes}^t (\tilde{a}_{ij})$$

定理 6.11

 $A\tilde{A} = \tilde{A}A = |AE|$

特にAが正則なとき、

$$A^{-1} = \frac{1}{|A|}\tilde{A}$$

定理 6.12 Cremer の公式

$$A = \left(a_{ij}\right)_{m \times n}$$
を正則行列、 $m{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$ とする。
未知数 $m{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ についての方程式

未知数
$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$$
についての方程式

$$Ax = b$$

の解は

$$A_i = \begin{pmatrix} a_{11} & b_1 & a_{1n} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{n1} & b_n & a_{nn} \end{pmatrix}$$

$$x_i = \frac{|A_i|}{|A|} \quad (i = 1, 2, \cdots, n)$$

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5 \\ 6 \end{pmatrix}$$
の解は

例

(1) ヴァンデルモンドの行列式

$$\begin{vmatrix} 1 & 1 & & & 1 \\ x_1 & x_2 & & & x_n \\ x_1^2 & x_2^2 & & & x_n^2 \\ x_1^{n-1} & x_2^{n-1} & & & x_n^{n-1} \end{vmatrix} = \prod_{1 \le i < j \le n} (x_j - x_i)$$

を示せ。

(2) a,b,cを相違なる実数とし

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ a & b & c \\ a^2 & b^2 & c^2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

をとけ。

第7章 ベクトルの内積・外積と図形 -------

●ベクトルの内積 (inner product)

 \vec{a} と \vec{b} の内積 $\vec{a}\cdot\vec{b}$ を

 $\vec{a} \cdot \vec{b} = |\vec{a}| |\vec{a}| \cos\theta$

と定義し、 $(\theta \, \text{は} \, \vec{a}, \vec{b} \, \text{のなす角})$

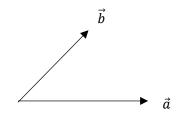
$$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix}, \vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

として

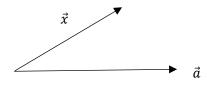
$$\vec{a} \cdot \vec{b} = a_1 b_1 + \dots + a_n b_n = \sum_{i=1}^n a_i b_i$$

になることを学んだ。

<図形的意味>



●正射影 (orthogonal projection)



 $\vec{a} \neq \vec{0}$ とする。

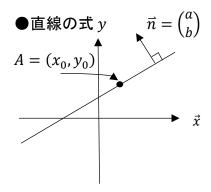
 \vec{a} に平行なベクトル $\overrightarrow{x'}$ で $(\vec{x}-\overrightarrow{x'})$ $\perp \vec{a}$ となるものを \vec{x} の \vec{a} への正射影という。

定理 7.1

 $\vec{x'}$ を \vec{x} の \vec{a} への正射影とするとき

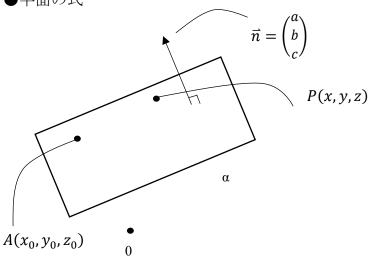
$$\overrightarrow{x'} = \frac{\overrightarrow{x} \cdot \overrightarrow{a}}{|\overrightarrow{a}|^2} \overrightarrow{a}$$

[証明]



xy平面上で点 $A(x_0,y_0)$ を通り、法線ベクトルが $\vec{n}=\begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$ $(\neq 0)$ となると直線の式を考える。

●平面の式



xyz空間で $A(x_0,y_0,z_0)$ を通る法線ベクトルが $\vec{n}=\begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$ ($\neq 0$) となる平面 α を考える。

[注]

n次元空間内で、1次式が表す図形はn次元の図形。

例

$$A(1,0,2)$$
を通る法線ベクトルが、 $\vec{n} = \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 3 \end{pmatrix}$ の平面の式は?

●点と平面の距離

定理 7.2

点A(p,q,r)と平面d: ax + by + cz + d = 0の距離hは、

$$h = \frac{|ap + bq + cr + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}}$$

**A(p,q)とl: ax + by + c = 0の距離は

$$\frac{|ap+bq+c|}{\sqrt{a^2+b^2}}$$

である。

[証明]

例

平面d: x + 2y + 3z + 5 = 0に対し、点A(1,2,1)と対称な点Bを求めよ。

●外積(outer product)

定義 7.3

 \vec{a} , \vec{b} を 3 次元のベクトルとし、 \vec{a} , \vec{b} の外積 \vec{a} \times \vec{b} を

(1)大きさを \vec{a} , \vec{b} で張られる平行四辺形の面積

$$(\vec{a} \parallel \vec{b}or\vec{a} = \vec{0}or\vec{b} = \vec{0}$$
で大きさ 0)

(2)向きを \vec{a} , \vec{b} の両方と垂直で \vec{a} , \vec{b} , $\vec{a} \times \vec{b}$ で右手系をなす向き

の2つで定義。

定理 7.4

 $(1)\vec{a}\times\vec{b}=-\vec{b}\times\vec{a}$

 $(2)\vec{a}\times\vec{a}=\vec{0}$

 $(3)(c\vec{a})\times\left(d\vec{b}\right)=(cd)\vec{a}\times\vec{b}$

 $(4)\vec{a}\times\left(\vec{b}+\vec{c}\right)=\vec{a}\times\vec{b}+\vec{a}\times\vec{c}$

定理 7.5

$$\overrightarrow{e_x} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \overrightarrow{e_y} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \overrightarrow{e_z} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \succeq \ \cup$$

$$\begin{cases} \overrightarrow{e_x} \times \overrightarrow{e_y} = \overrightarrow{e_z} \\ \overrightarrow{e_y} \times \overrightarrow{e_z} = \overrightarrow{e_x} \\ \overrightarrow{e_z} \times \overrightarrow{e_x} = \overrightarrow{e_y} \end{cases}$$

[証明]

定理 7.6

$$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}, \vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} \succeq \bigcup$$

$$\vec{a} \times \vec{b} = \begin{pmatrix} a_2b_3 - a_3b_2 \\ a_3b_1 - a_1b_3 \\ a_1b_2 - a_2b_1 \end{pmatrix}$$

〈覚え方〉

その1

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix} \times \begin{pmatrix} 4 \\ 5 \\ 6 \end{pmatrix} =$$

その2 余因子展開

$$\binom{a_1}{a_2} \times \binom{b_1}{b_2} =$$

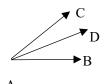
例 O を原点とするxyz空間上の点A(1,2,1),B(3,4,5)がある。

- (1) \overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} の両方に垂直なベクトルを1つ求めよ。
- (2) △ OABの面積を求めよ。
- (3) C(-2,1,c)が平面OABに含まれるときのcの値は?

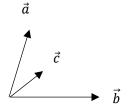
定理 7.7

4 点*A*, *B*, *C*, *D*が同一平面上にあるとき、

$$(\overrightarrow{AB} \times \overrightarrow{AC}) \cdot \overrightarrow{AD} = 0$$



●スカラー三重積



 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ で張られる、平行六面体の体積を考える。

定義 7.8

 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ のスカラー三重積を $\vec{a} \cdot (\vec{b} \times \vec{c})$ で定義。

定理 7.9

(1)
$$\vec{a} \cdot (\vec{b} \times \vec{c}) = \begin{vmatrix} a_1 & b_1 & c_1 \\ a_2 & b_2 & c_2 \\ a_3 & b_3 & c_3 \end{vmatrix}$$

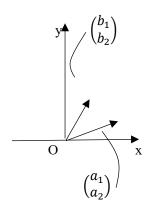
(2)
$$\vec{a} \cdot (\vec{b} \times \vec{c}) = \vec{b} \cdot (\vec{c} \times \vec{a}) = \vec{c} \cdot (\vec{a} \times \vec{b})$$

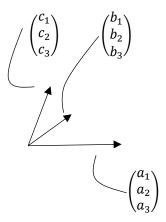
 $\vec{a} \cdot (\vec{b} \times \vec{c}) = -\vec{b} \cdot (\vec{a} \times \vec{c})$

$$\vec{a} \cdot (\vec{b} \times \vec{c}) = -\vec{b} \cdot (\vec{a} \times \vec{c})$$

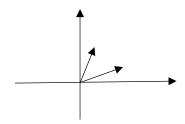
[証明]

すると、行列式は何かしらの体積量を表していそう!





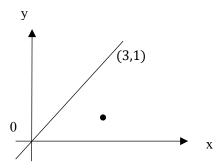
→ {ベクトルの関係性 を議論するのに、行列式は役に立つ。



第8章 2次元での線形写像

● $R^2 \rightarrow R^2$ での線形写像

$$y = x$$



y = xに関する対称移動を考える。

移動前の点を(x,y)、移動後の点を(X,Y)とおくと、

このような

$$f: \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^2$$
$$(x, y) \mapsto (X, Y)$$

なる写像fで、行列Aを用い、

$$\binom{X}{Y} = A \binom{x}{y}$$

とできるものを扱う。このときのfを線形写像、Aを表現行列という。 ※行列で表せると、行列の性質を用い、議論できるから調べやすい。

例 $(x,y) \mapsto (X,Y)$ なる以下の写像で、線形写像はどれか?

$$(1) \begin{cases} X = x^2 \\ Y = x + y \end{cases}$$

(2)
$$\begin{cases} X = 2x + y \\ Y = x + \frac{1}{y} \end{cases}$$

$$(3) \begin{cases} X = 2x + y \\ Y = x - 2y \end{cases}$$

例 表現行列が $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ -3 & 1 \end{pmatrix}$ の線形写像で、次の点がうつる先はどこか?

- (1) (2,1)
- (2) (-3,2)

例 線形写像fで

{点(1,−2)は点(2,1)にうつる 点(−1,3)は点(4,5)にうつる

ときのfの表現行列Aは?

●合成写像・逆写像

定理 8.1

 $\left\{ \begin{array}{ll} 線形写像 f の表現行列を A \\ 線形写像 g の表現行列を B \end{array} \right.$

としたら、

- (1) $g_{o}f$ は線形写像で表現行列はBA
- (2) A^{-1} が存在するとき、 f^{-1} が存在し、線形写像で表現行列は A^{-1}

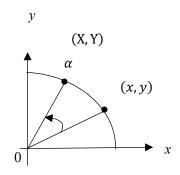
例

$$\left\{ egin{array}{ll} 線形写像 f の表現行列を A = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 2 & 1 \end{pmatrix} \\ 線形行列 g の表現行列を B = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ 5 & 4 \end{pmatrix} \right.$$

- (1) $f_{o}g$ と $g_{o}f$ の表現行列は?
- (2) f-1の表現行列は?

●回転移動(これも線形写像)

原点まわりに α だけ回転させる写像 $f:(x,y)\mapsto (X,Y)$ を考える。



定理 8.2 スカラー値関数A(u)の不定積分

 $\begin{pmatrix} \cos \alpha & -\sin \alpha \\ \sin \alpha & \cos \alpha \end{pmatrix}$ は原点まわりに α だけ回転させる線形写像を表す表現行列

例 点(1,3)を原点まわりに60°回転させた点の座標は?

例
$$\begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}^n$$
を求めよ。

[注]

原点以外を中心とした回転移動を表す写像は線形写像ではない。

●対称移動

例

x軸対称 … y軸対称 … 原点対称 …

xy平面で、l: y = mxで対称に移動させる写像 $f: (x,y) \mapsto (X,Y)$ を考える。

[注]

fが線形写像ってわかったら求める表現行列をAとし、

●線形写像の特徴

まとめ

 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ で表される線形写像は座標をかえずに、基底を

「 $inom{1}{0}$ と $inom{0}{1}$ 」から「 $inom{a}{c}$ と $inom{b}{d}$ 」にかえる写像とみれる!

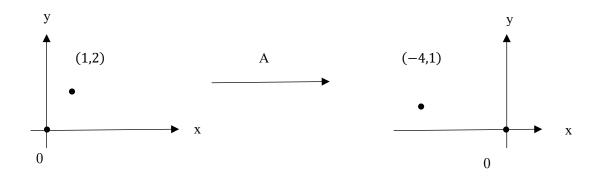
対称移動に注目したら、(m=2 とし…)

例 $A = \begin{pmatrix} 0 & -2 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$ とし、 A^n を求めたい。

- (1) $A {x \choose y} = k {x \choose y}$ となる ${x \choose y} \neq \mathbf{0}$ が存在するようなkを α 、 β とする $(\alpha < \beta)$ 。 α 、 β を求めよ。
- (2) $A {x \choose y} = \alpha {x \choose y}, A {x \choose y} = \beta {x \choose y}$ となる ${x \choose y} \neq \mathbf{0}$ を1つずつ求めよ。
- (3) $A^n \varepsilon(2) \varepsilon$ 用い、求めよ。

- Q.図形的考察
- ②よりAは $\binom{2}{1}$ 方向に-1倍
- ③よりAは $\binom{-1}{1}$ 方向に2倍

ベクトルを伸ばす写像



- Q.すると、私たちは 1.対象となる空間は何か?
- 2.対象となる写像は何か?
- 3.行列のn乗をどうだすか?

第9章 ベクトル空間

●ベクトル空間 (vector space)

定義 9.1

数の集合で、その中で四則演算が行えるものを体という。

(ただし、0でわることは除く)

例

 $\left\{ egin{array}{ll} 実数の集合 & R \ \hline & 複素数の集合 & C は体 \end{array} \right.$

 $\left\{ egin{array}{ll} 整数の集合 & {f Z} \ & & & & & \\ 自然数の集合 & {f N} \end{array}
ight.$

※体はよく"K"で表す(Körper)。この授業では、ほぼK = RorC

定義 9.2

以下をみたす集合 V を体 K 上のベクトル空間 (vector space) と定義。

 $[1]a,b \in V$ に対し、和a+bが V内で定義され

(i)(a + b) + c = a + (b + c)

(ii) a + b = b + a

(iii) a + 0 = aとなる $0 \in V$ が存在(この0を零ベクトルという)

(iv) aに対し、a + a' = 0となる $a \in V$ が存在(このa'をaの逆ベクトルといい、a' = aとかく)

[1] $\mathbf{a} \in V \land k \in K$ に対し、スカラー倍 $k\mathbf{a}$ が V内で定義され、

 $(v)(k+l)\mathbf{a} = k\mathbf{a} + l\mathbf{a}$

 $(vi) k(\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}) = k\boldsymbol{a} + k\boldsymbol{b}$

 $(vii)(kl)\mathbf{a} = k(l\mathbf{a})$

 $(viii)1 \cdot \boldsymbol{a} = \boldsymbol{a}$

※Vの元をベクトルという。

(1) 高校でやったベクトル(幾何ベクトル)の集合。

$$(2) \ \, \boldsymbol{R}^n = \left\{ \begin{pmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix} \middle| a_i \in \boldsymbol{R} \ (i=1,2,\cdots,n) \right\}$$

- (3) $M_{m,n}(\mathbf{R}) = \left\{ \left(a_{ij}\right)_{m \times n} \middle| a_{ij} \in \mathbf{R} \right\}$ なる $m \times n$ 行列の集合。
- (4) $P_n(\mathbf{R}) = \{a_0 + a_1x + \dots + a_nx^n | a_i \in \mathbf{R}\}$ なる n 次以下の多項式の集合。
- (5) $R = \{\{x_n\} | x_n \in \mathbf{R} \ (n=1,2,\cdots)\}$ なる実数列の集合。 ただし、

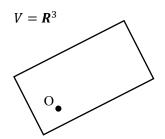
$$\begin{cases} \{x_n\}, \{y_n\} \in R \text{ C}, \ \{x_n\} + \{y_n\} = \{x_n + y_n\} \\ c \in \mathbf{K}, \{x_n\} \in R \text{ C}, \ c\{x_n\} = \{cx_n\} \end{cases}$$

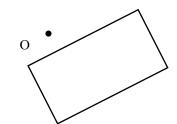
とする。

●部分空間 (subspace)

定義 9.3

ベクトル空間 V の部分集合 W が V の演算で、ベクトル空間となるとき、W を V の部分空間という。





定理 9.4

Vをベクトル空間とし、 $W \subset V$ とする。

WがVの部分空間

$$\Leftrightarrow \begin{cases} (i) \mathbf{0} \in W \\ (ii) \mathbf{a}, \mathbf{b} \in W \Rightarrow \mathbf{a} + \mathbf{b} \in W \\ (iii) k \in K, \mathbf{a} \in W \Rightarrow k\mathbf{a} \in W \end{cases}$$

[証明]

例 $a, b \in \mathbb{R}^3$ とし、

$$W = \{s\boldsymbol{a} + t\boldsymbol{b} | s, t \in \boldsymbol{R}\}$$

はR³の部分空間

定理 9.5

 $A \in m \times n$ 行列とする。

$$W = \{x \in \mathbf{R}^n | A\mathbf{x} = \mathbf{0}\}$$

は \mathbf{R}^n の部分空間。

[証明]

例 Wが R^3 の部分空間か調べよ。

(1)
$$W = \left\{ x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \middle| \begin{array}{l} x_1 + 2x_2 + 3x_3 = 0 \\ -x_1 + 3x_2 - 4x_3 = 0 \end{array} \right\}$$

(2)
$$W = \left\{ x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in R^3 \middle| \begin{array}{l} 4x_1 - 2x_2 + x_3 = 0 \\ -x_1 + 5x_2 - 3x_3 = 1 \end{array} \right\}$$

例 Wが $P_2(\mathbf{R}) = \{a_0 + a_1x + a_2x^2 | a_0, a_1, a_2 \in \mathbf{R}\}$ の部分空間か調べよ。

- (1) $W = \{f_{(x)} \in P_2(\mathbf{R}) | f_{(2)} = 0\}$
- (2) $W = \{f_{(x)} \in P_2(\mathbf{R}) | f_{(1)} = 1\}$
- (3) $W = \{f_{(x)} \in P_2(\mathbf{R}) | x f'_{(x)} = f_{(x)} \}$

●1 次独立、1 次従属(linearly independent,linearly dependent)

定義 9.6

Vをベクトル空間とし、 $v \in V$ が、 u_1, u_2, \cdots, u_n を用い

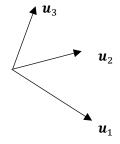
$$\boldsymbol{v} = c_1 \boldsymbol{u}_1 + c_2 \boldsymbol{u}_2 + \dots + c_n \boldsymbol{u}_n \ (c_i \in \boldsymbol{R})$$

とかけるとき、vは u_1, u_2, \cdots, u_n の1次結合(linear combination)でかけるという。また、

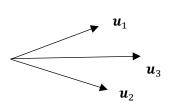
$$c_1 \boldsymbol{u}_1 + c_2 \boldsymbol{u}_2 + \dots + c_n \boldsymbol{u}_n = \mathbf{0}$$

 $\Leftrightarrow c_i = 0 \ (i = 1,2,\cdots,n)$ のとき、 u_1,u_2,\cdots,u_n は1次独立といい、そうでないとき、1次従属という。

<1 次独立>



<1 次従属>



例 $e_i \in \mathbb{R}^n (i = 1, 2, \dots n)$ を

$$\boldsymbol{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \boldsymbol{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \boldsymbol{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ \vdots \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

としたら、 e_1 ,… e_n は1次独立

例 $1, x, x^2, \dots, x^n \in P_n(\mathbf{R})$ は1次独立

例
$$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}$$
, $\begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ は1次独立か?

定理 9.7

 $\overline{}$ ベクトル空間 Vのベクトル $oldsymbol{u_1},\cdots,oldsymbol{u_n}$ が1次従属

 \leftrightarrow u_1 ,…, u_n のうち、少なくとも1つのベクトルが他のベクトルの1次結合でかける。

定理 9.8

ベクトル空間 Vのベクトル $\boldsymbol{u}, \boldsymbol{u}_1, \cdots, \boldsymbol{u}_n$ について

$$egin{cases} m{u}_1, \cdots, m{u}_n$$
は1次独立 $m{u}, m{u}_1, \cdots, m{u}_n$ は1次従属

ならuは u_1 ,…, u_n の1次結合でかける

[証明]

●1 次結合の記法

$$\begin{cases} v_1 = 2u_1 + 3u_2 - u_3 \\ v_2 = u_1 - 2u_2 - 3u_3 \end{cases}$$

を

とかくことにする。

例
$$\begin{cases} \boldsymbol{v}_1 = -\boldsymbol{u}_1 + 3\boldsymbol{u}_2 + \boldsymbol{u}_3 \\ \boldsymbol{v}_2 = 2\boldsymbol{u}_2 - \boldsymbol{u}_3 \\ \boldsymbol{v}_3 = 5\boldsymbol{u}_1 + 4\boldsymbol{u}_2 + 3\boldsymbol{u}_3 \end{cases}$$

定理 9.9

ベクトル空間 Vのベクトル u_1 ,…, u_n が1次独立で、Aを $m \times n$ 行列とし、

$$(\boldsymbol{u}_1,\cdots,\boldsymbol{u}_n)A=(\boldsymbol{0},\cdots,\boldsymbol{0})$$

のとき、 $A = \mathbf{0}$

[証明]

例 u_1, u_2, u_3 が1次独立で

$$\begin{cases}
 v_1 = 2u_1 + 3u_2 + u_3 \\
 v_2 = -5u_1 - 5u_2 - 3u_3 & \cdots (*) \\
 v_3 = 3u_1 - 2u_2 + u_3
\end{cases}$$

のとき、 v_1, v_2, v_3 は1次独立か?

定理 9.10

ベクトル空間 Vのベクトル $oldsymbol{v_1},\cdots,oldsymbol{v_n}$ と $oldsymbol{u_1},\cdots,oldsymbol{u_n}$ があり、

(i)
$$(\pmb{v}_1,\cdots,\pmb{v}_n)=(\pmb{u}_1,\cdots,\pmb{u}_n)$$
Aとかける $\Big(A$ は $m imes n$ 行列 $\Big)$

($\mbox{ii}\,)n>m$ ならば、 $m{v}_1,\cdots,m{v}_n$ は1次従属

第10章 次元と基底

● 1 次独立な最大個数

定義 10.1

Vをベクトル空間、 $v_1, \cdots, v_n \in V$ とする。この v_1, \cdots, v_n について

- (1) あるrコのベクトルは1次独立
- (2) EOr + 1コのベクトルも1次従属

をみたす $r \in N$ は1つだけとれる。このrを、 v_1 ,…, v_n の1次独立な最大個数と定義

例

$$(1) \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \rightarrow$$

$$(2) \ \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ -3 \\ 0 \end{pmatrix} \rightarrow$$

例

$$v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 4 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ -4 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

について

- (1)1次独立な最大個数を求めよ。
- (2)アコの1次独立なベクトルを選べ。
- (3)(2)の1次結合で残りのベクトルをかけ。

定理 10.2

 $A \in m \times n$ 行列とし

rank(A) = (Aの列ベクトルの1次独立な最大個数)

またAをn次正方行列としたら

Aが正則 $\leftrightarrow A$ のn コの列ベクトルは1次独立

例 $A & cl \times m$ 行列、 $B & cm \times n$ 行列とし、 $rank(AB) \leq rank(A)$ を示せ。

[証明]

*これを用いるとA を $m \times n$ 行列、B を $n \times m$ 行列とし、m > nならAB は正則でないことがわかる。

次に数ベクトル以外のベクトル空間でも戦える準備を行う。

定理 10.3

Vをベクトル空間とし \mathbf{u}_1 ,…, $\mathbf{u}_m \in V$ は1次独立とする。

 $v_1, \cdots v_n$ は

$$(\boldsymbol{v}_1, \cdots, \boldsymbol{v}_n) = (\boldsymbol{u}_1, \cdots, \boldsymbol{u}_m) A$$

とかけるとし、 $A = (a_1, \dots, a_n)$ とおく。

このとき、 v_1 ,…, v_n の1次関係と a_1 ,…, a_n の1次関係は同じ。

例 $f,g,h,i \in P_3(R)$ とし、

$$\begin{cases} f = 1 + x^3 \\ g = 1 + 2x + 2x^2 + x^3 \\ h = 1 + 4x^2 + x^3 \\ i = 1 - 4x + x^3 \end{cases}$$

とかけるとき、

- (1)1 次独立な最大個数 r を求めよ。
- (2)r コの1次独立なベクトルを選べ。
- (3)(2)の1次結合で、他のベクトルをかけ。

●次元と基底

定義 10.4

V をベクトル空間とし、 $v_1, \dots, v_n \in V$ とする。任意の $v \in V$ が v_1, \dots, v_n の 1 次結合でかけるとき、 v_1, \dots, v_n は V を生成するという。このときの v_1, \dots, v_n を生成元(generator)という。

例

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$
, $\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ は____を生成する。…(A)

$$\binom{1}{0}$$
, $\binom{0}{1}$, $\binom{2}{3}$ は____を生成する。…(B)

定義 10.5

 $v_1, \cdots, v_n \in V$ とする。これが

- (1) $\boldsymbol{v}_1, \dots, \boldsymbol{v}_n$ は1次独立
- (2) $\boldsymbol{v_1}$,…, $\boldsymbol{v_n}$ はVを生成する

をみたすとき、 $\{v_1, \dots, v_n\}$ はVの基底(basis)と定義。

例

上の(A)は

上の(B)は

 $%R_n$ 基本ベクトル $\{e_1, \cdots, e_n\}$ は R_n の基底。これを標準基底という。

定理 10.6

Vの基底の個数は一定

定義 10.7

 $\dim V = (V 基底の個数) と定義。$

(次元...dimension)

$$\left\{
 \begin{array}{l}
 dim \mathbf{R}_n = \\
 dim P_n(\mathbf{R}) =
 \end{array}
 \right.$$

定義 10.8

Vをベクトル空間 $oldsymbol{v}_1,\cdots,oldsymbol{v}_n\in V$ とし、

$$W = \{s_1 \boldsymbol{v}_1 + \dots + s_n \boldsymbol{v}_n | s_1, \dots, s_n \in \boldsymbol{R}\}$$

を v_1,\cdots,v_n で張られる(Vの)部分空間という。

これを

$$W = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$$

$$W = \operatorname{span}\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$$

とかく。

例 次のベクトル空間の次元基底は?

$$(1) W_1 = \operatorname{span}\left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right\}$$

(2)
$$W_2 = \operatorname{span}\left\{ \begin{pmatrix} 1\\1\\-1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2\\2\\-2 \end{pmatrix} \right\}$$

(3)
$$W_3 = \operatorname{span} \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \\ 4 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \\ -3 \end{pmatrix} \right\}$$

定理 10.9

 $\dim(\operatorname{span}\{v_1,\cdots,v_n\}) = (\{v_1,\cdots,v_n\} \mathcal{O} 1$ 次独立な最大個数)

(4)
$$W_4 = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_5 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^5 \middle| \begin{array}{l} x_1 + 2x_2 - x_3 + x_4 + x_5 = 0 \\ x_1 + x_2 + x_3 - x_4 + x_5 = 0 \end{array} \right\}$$

定理 10.10

Aを $m \times n$ 行列とし

$$W = \{x \in \mathbf{R}^n | Ax = \mathbf{0}\}$$

とすれば

$$\dim W = n - \operatorname{rank} A$$

例 $W = \{f_{(x)} \in P_3(\mathbf{R}) | f_{(1)} = f_{(2)} = 0\}$ の次元、基底は?

定理 10.11

Vをベクトル空間で $\dim V=n$ とする。 $oldsymbol{v}_1,\cdots,oldsymbol{v}_n\in V$ とし、次は同値

- (1) $\boldsymbol{v}_1, \cdots, \boldsymbol{v}_n$ はVの基底
- (2) v_1 ,…, v_n は1次独立
- (3) v_1 ,…, v_n はVを生成する。

第11章 線形写像

●線形写像とは…?

第 8 章で"行列で表せる写像"のことを線形写像といったが、これをベクトル空間で、一般に定義していく。

定義 11.1

U,V をベクトル空間とし、写像

$$T:U\to V$$

が次の2つをみたすとき、Tを線形写像(linear map)という

- (1) $T(x + y) = T(x) + T(y) \ (x, y \in U)$
- $(2) T(cx) = cT(x) (c \in R, x \in U)$

例

(1) $T: \mathbf{R}^m \to \mathbf{R}^n$ で $T(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} \ (\mathbf{x} \in \mathbf{R}^m)$ のとき、T は線形写像。

(2) $n \in \mathbb{N}$ とし、 $T: P_n(\mathbb{R}) \to P_{n-1}(\mathbb{R})$ がT(f(x)) = f'(x) $(f(x) \in P_n(\mathbb{R}))$ とすると、T は線形写像。

(3) $T: P_n(\mathbf{R}) \to \mathbf{R}$ が $T(f(x)) = \int_a^b f(x) dx$ をみたすとすると、T は線形写像。

(4) $f: \mathbf{R} \to \mathbf{R}$ が $f(x) = x^2$ $(x \in \mathbf{R})$ であるとすると、f は線形写像ではない。

定理 11.2

 $T:U \to V$ が線形写像 $\Rightarrow T(\mathbf{0}_U) = \mathbf{0}_V$

[証明]

例
$$f: \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}, f\left(\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}\right) = 2x + y + 1$$
は線形写像でない。

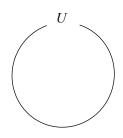
●線形写像の像(image)と核(kernel)

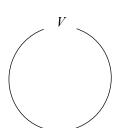
定義 11.3

線形写像 $T: U \to V$ に対し、

$$\begin{cases} \operatorname{Im}(T) = \{T(x) | x \in U\} \\ \ker(T) = \{x \in U | T(x) = \mathbf{0}_V\} \end{cases}$$

と定義。





定理 11.4

Im(T)はVの、ker(T)はUの部分空間

<復習>

定理 9.5

 $A em \times n$ 行列とする。

$$W = \{x \in \mathbf{R}^n | A\mathbf{x} = \mathbf{0}\}$$

は \mathbf{R}^n の部分空間。

例 次の線形写像 Tのker(T)とIm(T)の基底を求めよ。

$$T: \mathbf{R}^5 \to \mathbf{R}^4$$

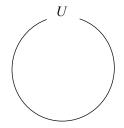
$$T(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 1 & -3 & -9 & -2 & 5 \\ -2 & 3 & 9 & 1 & -7 \\ -1 & 2 & 6 & 1 & -4 \\ 2 & -1 & -3 & 0 & 7 \end{pmatrix} \mathbf{x}$$

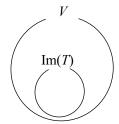
定理 11.5

 $T: U \to V$ なる線形写像とし

$$\dim(\ker(T)) + \dim(\operatorname{Im}(T)) = \dim U$$

※次元定理(dimension theorem)





[注] "行列で表せる写像"なら OK。他では…。

$$A = \begin{pmatrix} 1 & -3 & -9 & -2 & 5 \\ -2 & 3 & 9 & 1 & -7 \\ -1 & 2 & 6 & 1 & -4 \\ 2 & -1 & -3 & 0 & 7 \end{pmatrix} \sim \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 4 \\ 0 & 1 & 3 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & -2 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

く復習>

定理 10.10

 $A \in m \times n$ 行列とし

$$W = \{ \boldsymbol{x} \in \boldsymbol{R}^n | A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{0} \}$$

とすれば

$$\dim W = n - \operatorname{rank} A$$

●基底のとりかえと表現行列

〈復習〉

$$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$
で表される $\mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^2$ の線形写像は

$$\binom{1}{0}$$
を $\binom{a}{c}$, $\binom{0}{1}$ を $\binom{b}{d}$ に基底をかえてく写像とみれる。

→基底のかえ方を表現行列として定義していく。

定義 11.6

 $T: U \to V$ を線形写像とする。

$$\{U$$
の基底を $\{u_1, \cdots, u_n\}$
 V の基底を $\{v_1, \cdots, v_m\}$

としたら $T(\mathbf{u}_i) \in V(i=1,2,\cdots,n)$

ゆえ、 $T(u_i)$ は v_1, \dots, v_m の1次結合でかけるから、ある $m \times n$ 行列Aを用い、

$$(T(\boldsymbol{u}_1), \cdots T(\boldsymbol{u}_n)) = (\boldsymbol{v}_1, \cdots, \boldsymbol{v}_m)A$$

とかける。このAを

「Uの基底を $\{u_1,\cdots,u_n\}$,Vの基底を $\{v_1,\cdots,v_m\}$ としたときの $T:U\to V$ の表現行列」と定義

例: $\mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^3$, $T(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \\ 5 & 6 \end{pmatrix} \mathbf{x}$ とし、標準基底をとり、 \mathbf{R}^2 の基底を $\{\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2\}$, \mathbf{R}^3 の基底を $\{\mathbf{e}_1', \mathbf{e}_2', \mathbf{e}_3'\}$ とする。Tの表現行列は?

例
$$T: \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^3$$
, $T(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \\ 5 & 6 \end{pmatrix} \mathbf{x}$ で $\left\{ \begin{aligned} \mathbf{R}^2 \odot \mathbb{E} & \mathbb{E} & \mathcal{E} \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} \right\}_{\mathcal{E}} & \mathbb{E} & \mathbb$

※このように、基底がちがうと表現行列もかわる。定義域側の基底は汚くてもやれそうだが終域側の基 底が汚いとギリそう...。

例 $T: P_2(\mathbf{R}) \to P_2(\mathbf{R}), T(f(x)) = f''(x) + 2f'(x) + 3f(x)$ は線形写像(変換)。 $P_2(\mathbf{R})$ の基底をそれぞれ $\{1, x, x^2\}$ としたときの Tの表現行列?

例 $T: \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^2, T(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 2 & 3 \\ 4 & 2 \end{pmatrix} \mathbf{x}$ とする。 \mathbf{R}^2 の基底を $\left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} \right\}$ としたとき、Tの表現行列は?

定理 11.7

 $T: U \to V$ を線形写像とし

$$\left\{ egin{aligned} &U$$
の基底とし、 $\{oldsymbol{u}_1,\cdots,oldsymbol{u}_n\}, \{oldsymbol{u'}_1,\cdots,oldsymbol{u'}_n\} \\ &V$ の基底とし、 $\{oldsymbol{v}_1,\cdots,oldsymbol{v}_m\}, \{oldsymbol{v'}_1,\cdots,oldsymbol{v'}_m\} \end{aligned}
ight.$

をとるとP,Qを正方行列とし、

$$\begin{cases} \{\boldsymbol{u'}_{1}, \cdots, \boldsymbol{u'}_{n}\} = \{\boldsymbol{u}_{1}, \cdots, \boldsymbol{u}_{n}\}P \\ \{\boldsymbol{v'}_{1}, \cdots, \boldsymbol{v'}_{m}\} = \{\boldsymbol{v}_{1}, \cdots, \boldsymbol{v}_{m}\}Q \end{cases}$$

とかけ、PとQは正則(∵定理 10.3)

$$\left\{egin{aligned} ar{\mathbf{z}}_{\mathbf{L}} & ar{\mathbf{z}}_{\mathbf{L}} & ar{\mathbf{z}}_{\mathbf{L}}, \cdots, oldsymbol{u}_{n} \}, \{oldsymbol{v}_{1}, \cdots, oldsymbol{v}_{m} \}$$
での T の表現行列を B

としたら

$$B = Q^{-1}AP$$

例
$$T: \mathbf{R}^3 \to \mathbf{R}^2, T(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 1 & 3 & 2 \\ 2 & 4 & 5 \end{pmatrix} \mathbf{x}$$
とし、

$$\begin{cases} \mathbf{R}^3 \text{の基底を} \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\} \\ \mathbf{R}^2 \text{の基底を} \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 3 \end{pmatrix} \right\} \end{cases}$$

としたときのTの表現行列Bは?

例 $T: P_2(\mathbf{R}) \to P_2(\mathbf{R}), T(f(x)) = f''(x) + 2f'(x) + 3f(x)$ とする。 $P_2(\mathbf{R})$ の基底をともに $\{1+x,1+x^2,1+x+x^2\}$ としたときの Tの表現行列は?

定義 11.8

Uと Vをベクトル空間

 $T: U \to V$ を線形写像とする。

Tが全単射のとき、Tを Uから Vへの同形写像(isomorphism)という。

また、UからVへの同形写像が存在するとき、UとVは同形といい、 $U \cong V$ とかく。

定理 11.9

線形写像 $T: U \to V$ が全単射 $\leftrightarrow T$ の表現行列が正則

定理 11.10

U,Vをベクトル空間とし

- (1) $\dim V = n \Rightarrow V \cong \mathbf{R}^n$
- (2) $\dim U = \dim V \Rightarrow U \cong V$
- (3) $m \neq n \Rightarrow \mathbf{R}^m \cong \mathbf{R}^n$

第12章 固有値・固有ベクトルと対角化 ----

〈復習〉線形写像の特徴

第8章の最後に $A = \begin{pmatrix} 0 & -2 \\ -1 & -1 \end{pmatrix}$ で表される線形写像について、

$$\begin{cases} A \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} = -1 \times \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} \\ A \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} = 2 \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} \end{cases}$$

のよう

「ある方向だけ注目したら定数倍」となったりするので、そこから行列の考察ができたりする。

●固有値・固有ベクトル(行列で…)

定義 12.1

A を n 次正方行列とし、

$$Ax = \lambda x \ (\lambda \in R, x \in R^n | \{0\})$$

となるとき、

 $\begin{cases} \lambda EA$ の固有値 (eigenvalue) xE (固有値 λ に属する)Aの固有ベクトル (eigenvector)

と定義。

例 $A = \begin{pmatrix} 0 & -2 \\ -1 & -1 \end{pmatrix}$ としたとき

$$\begin{cases} A \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} = -1 \times \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} \\ A \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} = 2 \times \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix}$$

よりAの固有値はで

である。

定義 12.2

n 次正方行列Aの固有値 λ に対し、

$$W_{\lambda}(A) = \{ x \in \mathbf{R}^n | Ax = \lambda x \}$$

をAの固有値Aの固有空間(eigenspace)

と定義。

(※行列 A のとすぐわかるとき $W_{\lambda}(A)$ を W_{λ} とかく。)

例 次の行列Aの固有値と、それぞれの固有値の固有空間を求めよ。

$$(1) \ A = \begin{pmatrix} 5 & 2 \\ 2 & 2 \end{pmatrix}$$

(2)
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ -1 & 4 & 1 \\ 2 & -4 & 0 \end{pmatrix}$$

●対角化の手法

定義 12.3

n 次正方行列Aが対角化可能

⇔あるn次正方行列Pと、対角化行列Bを用い

$$B = P^{-1}AP$$

とかける。

例 次の行列が対角化できれば行え。また、 $n \in N$ とし、 A^n を求めよ。

$$(1) A = \begin{pmatrix} 5 & 2 \\ 2 & 2 \end{pmatrix}$$

(2)
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ -1 & 4 & 1 \\ 2 & -4 & 0 \end{pmatrix}$$

[解](やり方だけ...。)

- (1)
- ①固有値をだす
- ②固有ベクトルをだす。(次元に合わせて)
- ③②から、P,Bをつくり、対角化

また、

基本事項

$$(P^{-1}AP)^n = P^{-1}A^nP$$

$$\begin{pmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 \\ 0 & 0 & \gamma \end{pmatrix}^n = \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 & 0 \\ 0 & \beta^n & 0 \\ 0 & 0 & \gamma^n \end{pmatrix}$$

がいえるので、

例 次の行列が対角化できれば行え。また、 $n \in \mathbb{N}$ とし、 A^n を求めよ。

$$(1)A = \begin{pmatrix} 5 & 2 \\ 2 & 2 \end{pmatrix}$$

$$(2)A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ -1 & 4 & 1 \\ 2 & -4 & 0 \end{pmatrix}$$

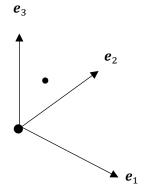
[解]

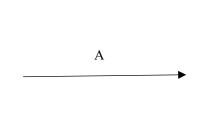
(2)

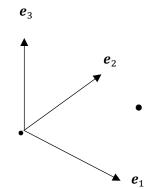
- ①固有値をだす。
- ②固有ベクトルをだす。(次元にあわせて)

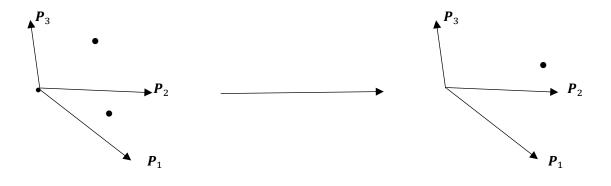
③②から、P,Bをつくり、対角化。

<イメージ>









$$\begin{cases} A \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} = 2 \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} \\ A \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} = 2 \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \\ A \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix} = 1 \times \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

で、 $P = (P_1 P_2 P_3)$ とおく。

●対角化可能性についての理論

定理 12.4

Aがn次正方行列のとき、固有値は、重複度込みでn コ。

定理 12.5

A & n次正方行列、Pを正則な行列とするとき、

 λ がAの固有値 $⇔\lambda$ が $P^{-1}AP$ の固有値

[証明]

定理 12.6

Aをn次正方行列とし

$$\left\{ egin{aligned} \lambda_i \ (1 \leq i \leq k) \& A \mathcal{O}$$
相違なる固有値 $\mathbf{v}_i \in W_{\lambda_i} \ (1 \leq i \leq k) \end{aligned}
ight.$

とする。このとき

 v_1, v_2, \cdots, v_k は1次独立

定理 12.7

A ϵ n 次正方行列,A の固有値の重複度を $N(\lambda)$ とする。このとき A が対角化可能 \Leftrightarrow すべての固有値 λ について $dimW_{\lambda}(A) = N(\lambda)$

第13章 内積

●内積 (inner product)

 $a,b \in \mathbb{R}^n$ では、よく内積 $a \cdot b$ を

$$a \cdot b = {}^t ab$$
 (行列の積)

として、定義した。

これがみたす性質を一般化し、ベクトル空間での内積を定義。

定義 13.1

VをR上のベクトル空間とする。

Vの2つの元からRのある元へと対応させる写像

$$V: \langle I \rangle: V \times V \to \mathbf{R}$$

が次の4つをみたすとき、(I)を Vの内積という。

 $u_1, u_2, u, v \in V, c \in R \succeq \bigcup$

- (1) $\langle \mathbf{u}_1 + \mathbf{u}_2 | \mathbf{v} \rangle = \langle \mathbf{u}_1 | \mathbf{v} \rangle + \langle \mathbf{u}_2 | \mathbf{v} \rangle$
- (2) $\langle c\mathbf{u}|\mathbf{v}\rangle = c\langle \mathbf{u}|\mathbf{v}\rangle$
- (3) $\langle u|v\rangle = \langle v|u\rangle$
- (4) $\mathbf{u} \neq \mathbf{0} \Rightarrow \langle \mathbf{u} | \mathbf{u} \rangle > 0$

内積を持つベクトル空間を、内積空間という

例 $u, v \in \mathbb{R}^n$ とし $\langle u|v \rangle = {}^t uv$ は \mathbb{R}^n の内積

例 $f(x), g(x) \in P_n(\mathbf{R})$ とし

$$\langle f(x|g(x))\rangle = \int_0^1 f(x)g(x)dx$$

とするとき、これは $P_n(\mathbf{R})$ の内積

定理 13.2

Vを内積空間とする。

 $u, v_1, v_2, v \in V, c \in R \succeq \bigcup$

- (1)' $\langle \boldsymbol{u}|\boldsymbol{v}_1+\boldsymbol{v}_2\rangle = \langle \boldsymbol{u}|\boldsymbol{v}_1\rangle + \langle \boldsymbol{u}|\boldsymbol{v}_2\rangle$
- (2)' $\langle \boldsymbol{u} | c \boldsymbol{v} \rangle = c \langle \boldsymbol{u} | \boldsymbol{v} \rangle$

が成立。また

(5) $\langle \mathbf{0} | \boldsymbol{v} \rangle = \langle \boldsymbol{v} | \mathbf{0} \rangle = 0$

[証明]

定義 13.3

内積空間 Vのノルム(norm)||:::||を $\boldsymbol{v} \in V$ とし、

$$\|v\| = \sqrt{\langle v|v\rangle}$$

と定義。

※ベクトルの"大きさ"を定義した。

定理 13.4

内積空間 V について、 $\boldsymbol{u}, \boldsymbol{v} \in V, c \in \boldsymbol{R}$ とし

- (1) $||c\mathbf{u}|| = |c|||\mathbf{u}||$
- (2) $|\langle u|v\rangle| \le ||u||||v||$ (Cauchy Schwarz の不等式)
- (3) $\|u + v\| \le \|u\| + \|v\|$ (三角不等式)

定義 13.5

内積空間Vのベクトル \mathbf{u} , \mathbf{v} で

$$\langle \boldsymbol{u} | \boldsymbol{v} \rangle = 0$$

のとき、uとvは直交するといい $u \perp v$ とかく。

例
$$\binom{1}{2}$$
 と $\binom{2}{-1}$ は

例 $C([-\pi,\pi]) = \{f(x)|f(x)$ は $[-\pi,\pi]$ で連続 $\}$ とし、 $C([-\pi,\pi])$ の内積を $f(x),g(x) \in C([-\pi,\pi])$ とし、

$$\langle f(x)|g(x)\rangle = \int_{-\pi}^{\pi} f(x)g(x)dx$$

とする。このとき、 $\cos x \perp \sin x$ 。

※一般に $m,n \in N \cup \{0\}$ とし

 $\begin{cases} \cos mx \perp \sin nx \\ \cos mx \perp \cos nx & (m \neq n) \\ \sin mx \perp \sin nx & (m \neq n) \end{cases}$

- $\rightarrow 1.\cos x,\cos 2x,\cdots,\sin x,\sin 2x,\cdots$ が1次独立とわかる。
- → Fourier級数展開へ。

定理 13.6

内積空間 Vのベクトル、 $\boldsymbol{v_1}$,… $\boldsymbol{v_n}$ が

$$\begin{cases} \boldsymbol{v}_i \neq \boldsymbol{0} \ (i=1,2,\cdots,n) \\ \boldsymbol{v}_i \perp \boldsymbol{v}_j \ (i\neq j) \end{cases}$$

をみたすとき、 $v_1, \cdots v_n$ は1次独立

[証明]

定義 13.7

内積空間 Vの基底 $\{v_1, \cdots v_n\}$ が

$$\begin{cases} \|\boldsymbol{v}_i\| = 1 \; (i=1,2\cdots,n) \\ \langle \boldsymbol{v}_i \big| \boldsymbol{v}_j \rangle = 0 \; (i\neq j) \end{cases} \cdots (*)$$

をみたすとき、 $\{v_1, \cdots v_n\}$ を正規直交基底(orthonormal basis)という。

[注](*)

例

(1) R^n の標準基底 $\{e_1, \cdots e_n\}$ は正規直交基底

(2)
$$\left\{ \begin{pmatrix} 1/2 \\ \sqrt{3}/2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -\sqrt{3}/2 \\ 1/2 \end{pmatrix} \right\}$$
は正規直交基底

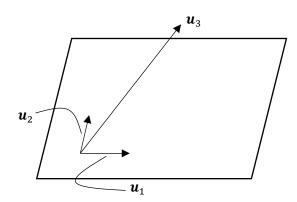
定理 13.8

内積空間 Vの 1 つの基底を $\{v_1, \cdots v_n\}$ とする。すると、V の正規直交基底 $\{u_1, \cdots u_n\}$ で $\langle u_1, \cdots u_r \rangle_R = \langle v_1, \cdots v_r \rangle_R \ (r=1,2,\cdots,n)$

となるものが存在する。

[証明]

(この証明で使用する、正規直交基底を求めていく手法を) グラムシュミットの正規直交化という。 (Gram - Schmidt)



グラムシュミットの正規直交化

基底 $\{v_1, v_2, \cdots v_n\}$ を正規直交基化して $\{u_1, u_2, \cdots u_n\}$ にする。

1.
$$u_1 = v_1/\|v_1\|$$

2.
$$v_2' = v_2 - \langle u_1 | v_2 \rangle u_1 \rightarrow u_2 = \frac{v_2'}{\|v_2'\|}$$

2.
$$v_{2}' = v_{2} - \langle u_{1} | v_{2} \rangle u_{1} \rightarrow u_{2} = \frac{v_{2}'}{\|v_{2}'\|}$$

3. $v_{3}' = v_{3} - \langle u_{1} | v_{3} \rangle u_{1} - \langle u_{2} | v_{3} \rangle u_{2} \rightarrow u_{3} = \frac{v_{3}'}{\|v_{3}'\|}$

4. $v_{4}' = v_{4} - \sum_{i=1}^{3} \langle u_{i} | v_{3} \rangle u_{i} \rightarrow u_{4} = \frac{v_{4}'}{\|v_{4}'\|}$

4.
$$v_4' = v_4 - \sum_{i=1}^{3} \langle u_i | v_3 \rangle u_i \rightarrow u_4 = \frac{v_4'}{||v_4'|}$$

例
$$\mathbf{R}^3$$
の基底 $\left\{ \begin{pmatrix} 1\\1\\1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1\\-1\\1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1\\2\\1 \end{pmatrix} \right\}$ を正規直交化。
$$= \mathbf{v}_1 = \mathbf{v}_2 = \mathbf{v}_3$$

例 $P_2(\mathbf{R})$ の内積を $\langle f(x)|g(x)\rangle = \int_0^1 f(x)g(x)\mathrm{d}x \ \big(f(x),g(x)\in P_2(\mathbf{R})\big)$ で定める。 $P_2(\mathbf{R})$ の基底 $\{1, x, x^2\}$ を正規直交基化せよ。

第 14 章 直交変換・対称行列の対角化 -------

定義 14.1

Vを内積空間、 $T:V \to V$ を線形変換とする。

Tが直交変換(orthogonal transformation) \Leftrightarrow すべての $u, v \in V$ に対し、

$$\langle T(\mathbf{u})|T(\mathbf{v})\rangle = \langle \mathbf{u}|\mathbf{v}\rangle$$

- ※線形変換で、内積が変化しない。
- →線形変換で、長さ・角度が変化しない。
- $\rightarrow T$ は 変換?

定理 14.2

Vを内積空間とし $\{u_1, \cdots, u_n\}$ をVの正規直交基底とする。

$$\begin{cases}
 u = a_1 u_1 + a_2 u_2 + \dots + a_n u_n \\
 v = b_1 u_1 + b_2 u_2 + \dots + b_n u_n
 \end{cases}$$

とかけるとき

$$\langle \boldsymbol{u}|\boldsymbol{v}\rangle = a_1b_1 + a_2b_2 + \dots + a_nb_n$$

[証明]

定理 14.3

Vを内積空間とし $\{u_1, u_2, \cdots, u_n\}$ を正規直交基底とする。

また、T を V の線形変換とし、<math>T が直交変換

 $\Leftrightarrow \{T(\boldsymbol{u}_1), \cdots, T(\boldsymbol{u}_n)\}$ が Vの正規直交基底

定理 14.4

Vを内積空間とし、 $\{oldsymbol{u}_1,\cdots,oldsymbol{u}_n\}$ を正規直交基底とする。

また、Tを Vの線形変換とする。

基底が $\{u_1, \dots, u_n\}$ でのTの表現行列をAとする。

(つまり、 $\left(T(\boldsymbol{u}_1),\cdots,T(\boldsymbol{u}_n)\right)=(\boldsymbol{u}_1,\cdots,\boldsymbol{u}_n)A$)

このとき、

Tが直交変換 \leftrightarrow t AA = E

定義 14.5

A を n 次正方行列とする。

A が直交行列 $\Leftrightarrow_{\square}^t AA = E$

と定義。

例
$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$
は直交行列。

$$\begin{pmatrix} \cos\theta & -\sin\theta \\ \sin\theta & \cos\theta \end{pmatrix}$$
は直交行列。

定理 14.6

A を直交行列とするとき

- (1) A は正則で $A^{-1} = {}^t_{\square}A$
- $(2)\det A = \pm 1$

[証明]

定理 14.7

 $A = (a_1 \cdots a_n)$ なる n 次正方行列とするとき、

A が直交行列 \leftrightarrow { $oldsymbol{a}_1,\cdots,oldsymbol{a}_n$ }が $oldsymbol{R}^n$ の正規直交基底

例
$$\left\{\frac{1}{\sqrt{3}}\begin{pmatrix}1\\1\\1\end{pmatrix}, \frac{1}{\sqrt{6}}\begin{pmatrix}1\\-2\\1\end{pmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}}\begin{pmatrix}-1\\0\\1\end{pmatrix}\right\}$$
は \mathbf{R}^3 の正規直交基底。
$$\rightarrow A = \begin{pmatrix}1/\sqrt{3} & 1/\sqrt{6} & -1/\sqrt{2}\\1/\sqrt{3} & -2/\sqrt{6} & 0\\1/\sqrt{3} & 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{2}\end{pmatrix}$$
は直交行列。



Aを実対称行列とするとき、Aの固有値は必ず実数である。

[証明]

定理 14.9

A を実対称行列とする。

 $\begin{cases} u & EA$ の固有値 λ に属する固有ベクトル v & EA の固有値 μ に属する固有ベクトル

とする。 $\lambda \neq \mu$ ならば $\mathbf{u} \perp \mathbf{v}$ である。

[証明]

→すると、各固有空間で、正規直交基底をとることで、直交行列を利用し、対角化できる!

例 次の行列 A を直交行列で対角化せよ。

$$(1) A = \begin{pmatrix} 1 & -2 \\ -2 & 1 \end{pmatrix}$$

(2)
$$A = \begin{pmatrix} 3 & 1 & 1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 1 & 1 & 3 \end{pmatrix}$$

定理 14.10

A を実対称行列とする。このとき、ある直交行列Pを用い

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1n} \\ 0 & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & a_{nn} \end{pmatrix}$$

とできるならば、Aは直交行列で対角化可能

[証明]

定理 14.11

A を n 次実正方行列とし、A の固有値は全て実数とする。 このとき A は上三角化可能である。

第 15 章 ジョルダン標準形

●対角化の復習(参照第 12 章)

例

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ -1 & 4 & 1 \\ 2 & -4 & 0 \end{pmatrix}$$
を対角化せよ。

① 固有値をだす。

② 固有ベクトルを求める。

③ ②から P,B をつくり, 対角化

※なぜこれで OK?

固有値・固有ベクトルの定義から

$$\begin{cases} A\mathbf{P}_1 = 2\mathbf{P}_1 \\ A\mathbf{P}_2 = 2\mathbf{P}_2 \\ A\mathbf{P}_3 = 1 \cdot \mathbf{P}_3 \end{cases}$$

 \Leftrightarrow

[注]

(*)の所で、ベクトルが足りない(固有空間が1枚)だと対角化不可。

→対角行列に似た,ジョルダン標準形を利用!

定義 15.1

行列Aが正方行列 A_1,A_2,\cdots,A_r の直和(direct sum) である

$$\Leftrightarrow A = \begin{pmatrix} A_1 & 0 & 0 \\ 0 & A_2 & 0 \\ 0 & 0 & A_r \end{pmatrix}$$

と定義。これを

$$A = A_1 \oplus A_2 \oplus \cdots \oplus A_r$$

とかく。

定義 15.2

$$J_n(\lambda) = \begin{pmatrix} \lambda & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \lambda & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \lambda \end{pmatrix} \ \ \, n$$

を固有値 λ に属する、大きさnのジョルダン細胞(Jordan cell)と定義。

定義 15.3

ジョルダン細胞のいくつかの直和をジョルダン行列(Jordan matrix)と定義。

例

(1)
$$A = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$
はジョルダン行列。

(2)
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}$$
はジョルダン行列。

(3)
$$A = \begin{pmatrix} -1 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 4 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 4 \end{pmatrix}$$
はジョルダン行列。

定理 15.4

任意の正方行列Aに対し、ある正則行列Pと、ジョルダン行列Bが

$$B = P^{-1}AP$$

をみたすようにとれる。

※BをAのジョルダン標準形(Jordan normal form)という。

定理 15.5

n 次正方行列 A の固有値 λ のジョルダン細胞は

$$\dim W_{\lambda}(A) \big(= n - rank(A)\big)$$

コとれる。

この2つを認めて、具体的にジョルダン標準形をだす。

例

$$(1) \ \ A = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ -1 & 4 \end{pmatrix}$$

(2)
$$A = \begin{pmatrix} 1 & 3 & -2 \\ -3 & 13 & -7 \\ -5 & 19 & -10 \end{pmatrix}$$

(3)
$$A = \begin{pmatrix} 4 & 3 & -1 \\ 3 & -3 & -2 \\ -4 & 7 & 5 \end{pmatrix}$$

[注]

$$(A-2E)x = \mathbf{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} \succeq \cup,$$

$$\begin{pmatrix} 2 & 3 & -1 & \vdots & b_1 \\ 3 & -5 & -2 & \vdots & b_2 \\ -4 & 7 & 3 & \vdots & b_3 \end{pmatrix}$$

以上の例から固有値λの大きさ2以上のジョルダン細胞がでたら

$$\begin{cases} ① (A - \lambda E)x = \mathbf{0} \rightarrow \mathbf{P}_1 \text{ だす} \\ ② (A - \lambda E)x = \mathbf{P}_1 \rightarrow \mathbf{P}_2 \text{ だす} \\ ③ (A - \lambda E)x = \mathbf{P}_2 \rightarrow \mathbf{P}_3 \text{ だす} \\ \vdots \end{cases}$$

として,ジョルダン細胞の大きさ分だけ,ベクトルをだし,並べるのが基本 →上手くいかない例もある。

例
$$(4) A = \begin{pmatrix} 1 & -2 & 6 \\ -1 & 2 & 3 \\ -1 & -1 & 6 \end{pmatrix}$$

●ジョルダン標準形の応用

定理 15.6 ケーリー・ハミルトン(Cayley-Hamilton)の定理

A を n 次正方行列とし

$$f_A(x) = \det(xE - A)$$

とする。(これはn次式で x^n の係数は1) このとき、

$$f_A(A) = 0$$
 (零行列)

[証明]

例

n次正方行列Aの固有値が全て0であるとする。このとき

$$A^n = \mathbf{0}$$

である。